

巻だと思えます。作者の子どもの姿を人間のかかりの中にとらえているところは教師としても学ばされず。

作者の視線がやわらかい子どもに注がれていることを感じます。

この本の対象は高学年でしょう。ルビも充分ふってありますから、中学年でも読めるかもしれません。この本を高学年の子に教室で家庭で読ませてもらいたいかがでしょう。私の六年生のクラスにも長岡からお母さんが来た子二人、親のいのある子三人います。決してよそのはなしではないのです。子ども達に空襲のこわさや状況を伝えるということもあるでしょうけれど、やはりそれより、ひまわりのように逞しく生きぬく子たちが、お互いの自立と幼ない仲間への自主へのはげまし、まわりの大人たちのかかわりの中で変容していくすばらしさ、楽しさを味わってほしいと思つうのです。

新潟県の地域にしっかりと根をはった児童文学のひとつにふれたと思います。

まず一人でも多くの教師・父母が読んでみましょう。今まではちがった話題が、教室で家庭でふえるはず

(新潟市・丸山小学校)

新潟県医師会編

### 「明るく 遅い 成長のために」

片岡 弘

今日、子どもたちの心と体の発達のがみはいよいよ深刻さを増して進行してきている。私が担任している小学校二年生に例をとれば、たとえば、積極的に身体を動かして物事に働きかけることを厭うとか、感情や感性が衰弱し、話しかけるとか、生活語彙がたいへん貧しくなっているとか、人間的な価値意識の獲得が困難になっているとか……等々の姿でそのことが現われている。低学力、非行、家庭内暴力、校内暴力という今日的な問題の奥底にも、そうした言わば「人間的なものの発達」の危機が潜んでいるとも言えるだろう。

端的に言つてそのように考えていた折、新潟県医師会編「明るく 遅い 成長のために」という冊子を読む機会を得た。

二七〇ページから成るこの冊子は勿論学会の報告書などではない。序文で、県医師会長の相沢三雄氏は、「本書は、子どものヒューマンバイオロジ（人間生態学）と考えます」のひとこととして、次代を担うべき子ども達の明るくたくましい成長を希いつつ、世の大人たちに問いかけるべく作られたものです」と書いてい

る。

正直言つて私は、今まで、県の医師会がこうした事業（これまで、「健康やお母さんのための健康教育」「健康教育シリーズ」という冊子を、「健康のために」という冊子を、「心と体の成長のために」という冊子を、「健康教育シリーズ」として刊行しているという）を行なっているなどとは夢にだに思わなかった。それだけに、引用した相沢会長の言葉には少なからぬ感動を覚えた。というのは、執筆者たち（研究者や開業医）がそれぞれの医学の専門分野について書きながら、しかし全体としては「人間形成学」という極めて今日的な課題に位置づけて、この冊子をまとめようと努力されているからである。そこには、今日子どもをめぐる問題状況を真面目に深刻に受けとめ、医師として何をすべきかを模索しようとする医師集団の良心と意欲がにじみ出ていると思う。

第一章では、「子どもの成長と発育」と題して、新大小児科の渡辺渡氏が、胎児期から青年期までの、身体発育と精神発達を概観している。限られたスペースのせいであらう、やや教科書風になつてしまつたきらいがないでもない。しかし、子どもが「人間として」成長していくということはどういうことかという視点を一貫させており、特に感情や意志を統御する前頭葉の機能の大切さを述べ、遊びや労働経験が前頭葉の発達をうながすことにならながら「早

期からの孤高のエリート教育には、それなりのリスクを覚悟してのぞまなければならない」と警告している点など注目ししよう。

以下、II 新生児期における母乳哺育（関塚正昭氏・新発田市）、III 鉄と体力づくりのための栄養（吉田修氏・新潟薬科大）、IV 一歳六か月児及び三歳児健診の意味するもの（相場益夫氏・燕市）、V 子どもへの期待と子どもの注文（相場益夫氏）、VI 小児と動脈硬化症（丹田稔氏・村上市）、VII 小児の疾病の予防・診断・治療（笹川力氏・新潟市民病院）、VIII 子どもたちをタバコの煙から守るために（目沼知男氏・新潟労災病院）IX 健康について生徒並びに父兄の関心度についての調査（河内実氏・南魚沼郡）、X 子どもと家庭（三沢博人氏・信楽園）、XI 体力づくり・その1、XII 体力づくり・その2（鈴木啓三氏・北魚沼郡）と、いわば医師たちの現場からの、世の親たちへの提言が開陳されている。

関塚氏は、アメリカに追随した戦後日本の産科学の問題、粉乳企業の誇大な宣伝が母親に母乳哺育への自信を失わせた点などを指摘しながら、「なぜ今、再び母乳哺育なのか」を丁寧に解説している。

「肥満児は成人病の予備軍である」  
「子どもにも成人型疾病が増えている」  
「動脈硬化の予防は小児期から」（吉田・丹田・笹川各氏）  
「子どもにも与えるタバコの害」（目沼氏）の各編

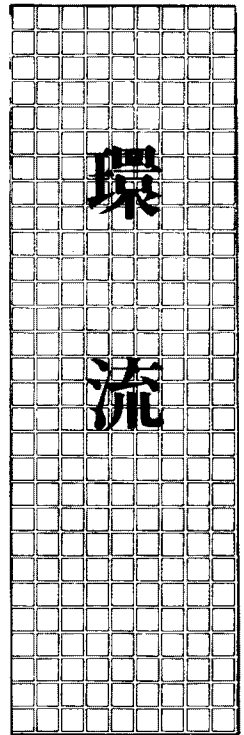
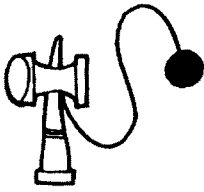
は、執筆者がそれぞれの専門医であるだけに説得力のあるものになっている。また、相馬氏、河内氏が病院の門を出て、教師や親たちと交流し合いながら、それぞれ、高校生や小中学生の意識調査をされた労には頭が下がる。そこで得られた結果などが、今後、例えば、三沢氏の「子どもと家庭」、鈴木氏の「体力づくり」などのような論考に生かされていくことを期待したい。

最後に、この冊子の編集(馬場賢一氏)だが、医学用語には疎い私たち素人にも飽きさせない配慮が実によくされているということである。文章は全て敬体、欄外に分かり易い小見出し、随所にコラム欄をそう入するなど心憎いまでである。残念なのは、この冊子が一般には市販されていないことであろう。

(岩船郡荒川町金屋小学校)

(注) 連絡先

新潟県医師会 電話二二六三八一(代)



### わかりたいという意欲の強烈な表現

佐藤 守正

まなぶ君の文字の習得が一ばん遅れてしまった。彼はがまんが続かない。「ゆ」の文字の練習で、黒板に大きく書く私の手の動きに合わせて、鉛筆を持って挙げた腕を動かす時はおもしろそうにやっていたが、ノートに書く段になると、

「こっけのめんどくせいがはやだなあ。」

とつぶやき始め、三文字ほど書くと鉛筆を放り出し、大きなあくびをして、くるりとうしろを向いてしまった。まなぶ君は鉛筆が正しく持てない。指に力が充分入らないため、いつもくねくねと曲がって、終わりも何となく消えているような頼りない線で文字をかき。そんな彼にとっては、「ゆ」のような複雑な線は抵抗が大きすぎるのだ。

休み時間に私はまなぶ君に話しかける。

「まなぶ君、ゆはめんどろだったなあ。まなぶ君はいくつ書いたの？」

「おら、いっぱい書いたよ。」

「そうかなあ、先生が見ていたら、三つくらいしか書かなかったぞ。休み時間にもうちよっとがんばろうか。」

「やだ、やだ、だってばく、くたびれたもん。それ

にすなあそびするよていだもん。」  
といいながら逃げだしていく。よていなどという大人びたことばに苦笑しながら、私は、学習から解放されると、とたんに元気になるまなぶ君の後姿を見送っている。

算数の時間。机の上に小さな積木を並べ、十の位の部屋に一本と一の位の部屋に五こで15と、20までの数の学習をやっていた時のこと。突然、

「こんげんがはわからない！」と叫んだまなぶ君は、机の上の積木を払いおとしてしまった。またはじまった。しかし、ここでこの子一人にかかわっていると、夏休みまでの予定が終わらない、あとで手をさしおべてやるから今はがまんしろよと思いつきながら、

「次は、18を作ってみましょう。」と彼を無視して学習をつづけた。ひらがなの学習はともかく、加減算だけはよくわかるという自信は持っていたまなぶ君だけに、算数もわからなくなってきたことに耐えられないのだろう。その上無視されたとなったら、もうがまんできない。隣近所の子の積木まで払いおとし始めた。私も放っておけなくなつて、

「まなぶくん、やめなさい！」と叱りながら彼の手を引っぱってきて、

「あとで教えてあげるから、ここで待っていなさい。」と教卓のわきに坐らせようとした。とたんに彼は、

